愛媛大学医学部における小論文入試への取り組みとその成果について

（研究紀要No.25）

植田　規史・内海　爽・平　直樹

愛媛大学医学部では，卒業後に社会に貢献できる学生を育成するために文系の学力を重視し，知情意のバランスがとれた人材の選抜を目指して入試改革を続けてきた。その試みの一環として昭和54年度から小論文試験を導入し，昭和60年度から現在まで「英文で出題，日本語で解答」の形式でそれを行っている。平成５年度からは分離分割方式が導入され，小論文試験は後期日程で実施することとなった。本研究では，データに基づき様々な角度から平成６年度までの小論文入試の評価，分析を行った。

近年の問題の特徴を把握するために平成４～６年度の問題について，図１のように「上位群と中位群の得点率に関する設問散布図」を描いた。白い点（○△□）は小問を表す。○は平成４年度，△は５年度，□は６年度の設問である。横軸は中位群（得点によって５群に分けた３番目の群の受験者）の得点率を表し，困難度の指標となる。右に行くほど易しい問題である。縦軸は上位群と中位群の得点率の差を表し，識別性能の指標である。点が上にあるほど識別性能が高い。右下から斜め上への実線は，上位群の得点率が100％の位置である。点線は，上位群の非得点率が中位群の80％となる位置であり，これより下の設問は，識別性能が低くて選抜機能が不十分と考えられる。黒い点（●▲■）は小問を合計した大問を表す。平成４～６年度では大問はそれぞれ２題ずつ出題されている。

結果的には半分以上の点が50％を下回っていることから，出題がやや難しすぎたと言える。特に，平成５年度は，識別性能が不十分である。一方，平成６年度は，以前と比較して改善が見られる。以下，「設問得点率分析図」を用いて個々の問題内容の検討を行った。

次に，同様の方法を用いて，他の諸教科との関連の中で昭和63年度以来の小論文試験の機能を分析した。センター試験は毎年５教科５科目で変化はないが，平成５，６年度後期日程では

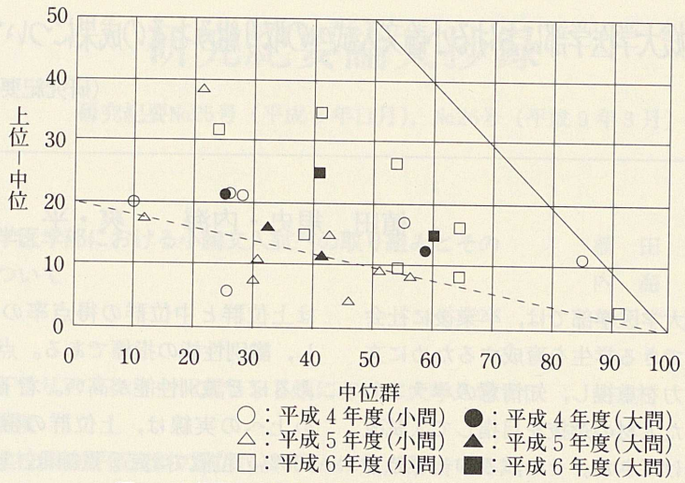

図１．上位群と中位群の得点率に関する設問散布図
（平成４年度～平成６年度：小論文）

個別試験の数学，理科が廃止され，小論文１科目となった。センター試験と個別試験の役割は年度にかかわらず安定していた。平成４年度までは小論文試験の識別性能は低く，合否は主に個別試験の数学，理科のできで決まってきたと思われる。一方，平成５，６年度は，識別性能が改善された。しかしながら，平成６年度には各設問の識別性能が向上していたにもかかわらず，それが科目の効果としては目に見えて反映されていなかった。

次に，志願者・合格者の属性の推移と小論文試験の影響について昭和54年度以来の経年的分析を行った。昭和62年度に受験機会が複数化され，それ以降の倍率が上昇した反面で志願者の文系学力の水準が一時的に大幅に低下した。一方，合格者の学力水準は平成４年度まで安定して一定の水準を保ってきた。また，理系学力が文系学力を若干上回ってきた状況にも変化がない。ところが，分離分割方式が導入された平成５年度以降には，前期日程と後期日程に際立った違いが見られるようになった。合格者の学力については，後期日程では文系学力の向上が著しかった。平成５年度以降の後期日程合格者の文系学力は，理系学力を上回っている上に理系学力の低下も見られない。前期日程においても合格者の文系学力の低下は見られていない。また，後期日程の志願者の文系学力の水準は以前の年度の合格者の水準をも上回っていた。一方，前期日程志願者にはなぜか理系学力に急激な落ち込みが見られ，個別試験に小論文を課す後期日程の志願者が数学と理科からなる前期日程志願者を理系学力の水準においても上回る結果となった。また，以前の年度では志願者学力の向上は倍率の低下を伴っていたが，平成５，６年度においては後期日程において倍率の低下は起こっていない。すなわち，入試改革が新たな受験者層を引きつけたと考えることができるのである。続いて，学力以外の特性についても分析したところ，前期日程と後期日程の志願者，合格者に，大きなカラーの違いが見られた。単純化して言えば，「男子」，「現役」，「県内出身」，「理系一般の志望を一部含む」，「愛媛大学医学部専願」といった点が前期日程の特徴であり，「女子」，「浪人」，「県外出身」，「医・歯・薬系志望」，「他大学との併願」といった点が後期日程の特徴であった。

結論として，長年にわたって課題であった「文系学力の重視」というポリシーが平成５年度以降の分離分割方式の導入によって結実しつつあるように思われる。特に，後期日程における小論文試験の役割は大きい。昭和60年度以降の出題形式が，理系のみに偏らない総合的な学力バランスを持った志願者層を引き付けつつあるように思われる。一方，最大の課題は，「文系学力の重視」という方略が果たして本当に「良い医師」「良い医学研究者」になる資質を持った学生を集めることに結びついているのか，ということの確認である。このためには，入念な追跡調査が必要である。

愛媛大学医学部の入試制度が現行の後期重視型を続けていくかぎり，小論文の入学者選抜方法に果たす役割はますます重要となるのは明らかである。学力試験の補完というだけではなく，実施の意義が本質的に問われてくるであろう。小論文試験については，今後も試行錯誤が続けられていくと思われるが，本研究のようにデータに対して様々な角度からの分析を行う検討は，今後も必要となってくるであろう。